

【技術名】高密度播種育苗

高密度播種育苗技術は、 育苗コスト低減と田植え作業の省力化が可能です！

【技術の要約】

1箱当たり250g（乾籾重）を播種する高密度播種育苗技術は、慣行体系に比べ、低コスト、省力化が可能で、慣行の栽培と同等の収量、収益が得られます。

【技術の内容】

- 1箱当たり250g（乾籾重）を播種する高密度播種育苗（図1）を目標植え付け本数（3～5本/株）で植え付ける栽培体系は、慣行（稚苗、中苗）体系に比べ、省力化、低コスト化が可能です。
- 高密度播種育苗で使用する箱数は10a当たり7箱程度で、稚苗の約4割となり（図2）、育苗施設の有効活用、育苗資材や育苗労力（育苗期間は約20日）の削減、田植え時の苗補給作業の省力化により、コスト低減が図れます。その結果、規模拡大が可能となります。
- 高密度播種育苗技術は、稚苗と同等の苗質の確保が可能で、慣行体系と同等の収量、品質が得られます。
- 高密度播種育苗に対応する播種機や田植機が必要です（専用機もありますが、既存機でも対応可能な機種があります）。
- 徒長苗にしない育苗管理が必要です。2葉期に田植えを行うよう、育苗期間は20日程度とします。



図1 高密度で播種した状況
中央：250g播種 右：160g播種

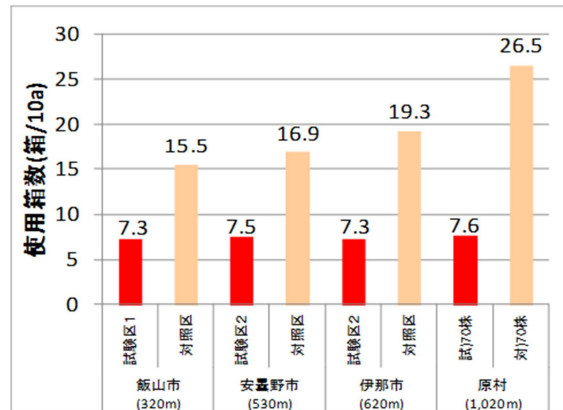


図2 高密度播種による使用箱数の低減効果
(H29 新稲作研究会試験結果より)

【留意事項】

- 苗箱施薬剤は本田への農薬投下量が減ることから、移植後の病害虫防除は、発生状況により本田施薬剤を用いてください。
- この技術は、苗質、育苗箱削減について、平成28、29年度技術情報として情報提供可能です。その他の技術は、普及技術化に向けて試験中です。技術の詳細は農業改良普及センターへお尋ねください。